

母親の幸福感が子どもの家族イメージに及ぼす影響

The Effect of Mother's Well-being on Family Image of Child

石崎 一記

(東京成徳大学)

三杉達也・森崎あゆみ・森 有理香

(東京成徳大学大学院)

Kazuki ISHIZAKI (Tokyo Seitoku University)

Tatsuya MISUGI (Graduate School of Psychology Tokyo Seitoku University)

Ayumi MORISAKI (Graduate School of Psychology Tokyo Seitoku University)

Arika MORI (Graduate School of Psychology Tokyo Seitoku University)

要 約

本研究は、母親の心理・行動的側面を母親の主観的幸福感、夫婦関係、社会的つながりをもとに測定し、それらが子どもの家族イメージにどのような影響を及ぼすかについて検討した。その結果、母親の主観的幸福感、夫婦関係満足度と、子どもが捉える母親のパワーイメージに関連が見られた。よって、母親が幸せを感じていたり、夫婦関係が円滑に営まれていることを子どもは敏感に感じ、母親の存在を強く捉えるということが示唆された。また、子どもが母親の存在感を強く捉えている場合に、母親自身はさらに幸せに感じたり夫婦関係が良くなるといったことが考察された。

キーワード：主観的幸福感、家族イメージ、夫婦関係、社会的つながり

I. 問題と目的

教育現場において、非行やいじめなど、様々な問題行動や不適応を起こす子どもが後を絶たない。このような状況は、中学・高校だけでなく、小学校でもみられるようになってきている。この背景には家族関係が重要な一要因であると考えられる。子どもが成長する上で、子どもに対して影響力が強いのは、社会との関わりの出発点となる家族であることはいままでもなく(大下・亀口, 1998)、子どもたちの家庭外での成長・発達を支えるのは、子どもが依って立つ家族関係であり、家族関係が健全に機能しているかどうかが大きく関係する

(菅原他, 2002)。また、乳児期・幼児期だけでなく、児童期の子どもたちの発達においても、養育者の行動や人格は深い関わりをもつ。つまり、子どもの成長・発達はもちろんのこと、子どもの精神的安定・学校適応には、家族関係が健全に機能しているかどうかということが、強い影響をもつといえる。さらに、数井(1998)によれば、家族内の雰囲気は、家族システムの一部である母親の心理・行動などが、他の家族成員と密接な相互作用をもち、この相互作用のダイナミックスによって生み出されるという。これらのことから、子どもの状態を考える上で、家族の中でも母親の心理・行動的側面について注目する必要があると考えら

れる。そこで、本研究は、母親の心理・行動的側面を母親の主観的幸福感をもとに測定し、それが子どもの家族イメージにどのような影響を及ぼすかについて検討する。また、先行研究から母親の社会的つながりと夫婦関係の満足度が母親の主観的幸福感に影響すると考えられるため、その要因についても検討を行なう。

II. 方法

調査時期は2007年10月。調査対象は、埼玉県K市内小学校5・6年生(140名)とその母親、1～4年生の子どもを持つ母親(160名)であった。母親300名のうち、有効回答者は207名(平均年齢38.3歳、 $SD=4.7$)で回収率は69.0%であった。

5・6年生の児童には、家族イメージ法(FIT)を用い、調査を行った。家族イメージ法(FIT)とは、Family Sculpture Techniqueを秋丸・亀口(1988)らが独自にアレンジしたシンプルな形の投影法の一種であり、その方法は、縦15cm、横15cmの正方形の中に、家族成員のパワーを表す(黒から白までの5段階)直径1.5cmの円形シールを、関心の向いている方向に矢印を向けて貼り付け、各家族成員の2者間を3種類の線で結ぶというものである。これによって、家族成員間の力関係の違いや結びつきの強さについて、子どもがどのように捉えているかを明らかにすることが出来ると考えられている。テストは、担任の指示により学級において実施された。所要時間は約20分間であった。

母親に対しては、フェイスシート、社会的つながり(「ボランティア活動をしている」など11項目それぞれについて、当てはまるかどうかの回答を求めるもの)、4件法によって回答する夫婦関係満足度尺度6項目(諸井, 1996)、4件法によって回答する主観的幸福感尺度12項目(伊藤ら, 2003)からなる質問紙を自宅で行ってもらい、後日回収された。

III. 結果・考察

1. 母親の主観的幸福感について

主観的幸福感に関する質問12項目(4件法)の平均と標準偏差を求めたところ、平均33.8点、 $SD=4.35$ であった。

2. 母親の夫婦関係満足度および社会的つながりと主観的幸福感について

夫婦関係満足度に関する6項目に対する回答の合計数の平均と標準偏差を求めたところ、平均17.46、 $SD=4.15$ であった。主観的幸福感との相関係数を求めたところ、やや強い相関がみられた($r=.47, p<.01$)。母親の持つ夫婦関係満足度と主観的幸福感との間に密接な関係があると思われる。遠藤(1997)は、主観的幸福感は夫婦関係がうまくいっているという認知が大きく関係すると述べている。また、母親が夫婦の関係性をどのように認識しているかということが、母親としての精神的健康に影響する(澤田, 2006)といった研究と同様の結果であった。

社会的つながりに関する11項目に対する回答の合計数を社会的つながりとして平均と標準偏差を求めたところ、平均4.72、 $SD=2.07$ であった。主観的幸福感との相関係数を求めたところ、これについても、やや強い相関がみられた($r=.33, p<.01$)。松井(2006)は、女性は人間関係に起因するストレスが高くなると述べている。しかし、女性は誰かに話し共感を得ることによってストレスを解消しようとすることも考えられることから、「人間関係」は女性にとって良いストレスサーにも悪いストレスサーにもなることが考えられる。このことから、本研究の対象者の母親は、社会的つながりをもち、自分の世界が広がっていると肯定的に捉えることにより、幸福感も強くなるのではないかと考えられる。

以上のことから、母親の主観的幸福感を規定す

る要因として、夫婦関係と社会的つながりなどの人間関係の充実感が関係していることが見出された。さらに、補足的に求めた幸福感に関する自由記述には、これらの要因に加えて子どもの成長や自らの自由などが多く見られた。これらの要因については、今後さらに検討を加えていきたい。

3. 子どもの家族イメージ

子どもが表した家族イメージ図について、母親を対象とした質問紙の回答が得られた73ケースについて、分析を行った。

(1) 家族成員間の結びつき

シールとシールを結ぶ線が、それぞれの家族成員間の結びつきを表している。二重線は「強い結びつき (3)」、実線は「ふつう (2)」、点線は「よくわからない (1)」である。

父母、父子、母子それぞれの結びつきの強さについて、平均と標準偏差を求めた。その結果、父母2.44 ($SD=0.71$)、父子2.36 ($SD=0.63$)、母子2.58 ($SD=0.57$)であった。

父母の結びつきについて「強い結びつき (3)」とイメージした者が56.3%で最も多く、次に多かったのが「ふつう (2)」とイメージした者が31.0%だった。父子の結びつきについては、「ふつう (2)」とイメージした者が48.0%で最も多く、次に多かったのが「強い結びつき (3)」をイメージした者が44.0%だった。母子の結びつきについては、「強い結びつき (3)」をイメージした者が62.8%で最も多く、次に多かったのが「ふつう (2)」をイメージした者で、33.3%だった。これらの結果から、子どもから見た結びつきの強さは、強い順に、母子、父母、父子となった。これらは、児童からの自由記述からもみられるように、母親とは学校のことなど日常的によく話をする相手であるため、母子について強い結びつきが見られたのではないかと考えられる。しかし、2者間それぞれの強さの違いについて検討したところ、有意な差は見ら

れなかった。よって、子どもは家族成員それぞれの関係において、結びつきの強さに差は見られるものの、日本人特有の母子密着型のような極端な結びつきとしては捉えていないことが考えられた。

(2) 家族成員のパワーイメージ

パワーイメージは、濃淡5色のシールを使って、各家族成員が持っている権力、権威を表す項目である。パワーが強ければ強いほど、その人に力を感じているということを表す。

父、母、子それぞれのパワーイメージについて、平均と標準偏差を求めた。その結果、父4.15 ($SD=1.04$)、母3.65 ($SD=1.17$)、子3.06 ($SD=1.06$)であった。父親に対して「強いパワー (5)」をイメージした者が48.0%で最も多く、次に多かったのが「やや強いパワー (4)」とイメージした者で29.3%だった。母親に対しては、「やや強いパワー (4)」をイメージした者が34.1%で最も多く、次に多かったのが「強いパワー (5)」で26.8%だった。子(自分自身)に対しては、「普通のパワー (3)」をイメージした者が38.6%で最も多く、次に多かったのが「やや強いパワー (4)」をイメージした者で22.9%だった。

次に、父、母、子、三者間のパワーイメージを比較し、家族内のパワーバランスを13通りのタイプに分類した。その結果、父>母>子のタイプが27%で最も多く、次に高かったものが父=母>子で12.2%となった。また、家族の中で父親が最も強い(母・子が同程度に強い場合も含む)とイメージしている割合は、全体の67.6%となった。以上の結果からも、過半数以上の小学生が、父親が家族の中で最も権力があるとイメージしていることが分かった。この結果は、新藤ら(2002)と同様の結果となった。

ミニューチン(1984)は、家族がうまくいくには、分化した権威の行使が親サブシステムにとって必要であるということを受け入れる必要があり、子どもにとって家族は社会的訓練の実験室であっ

て子どもは不平等な力関係でいかに交渉するかを学ぶ必要があると述べている。莊巖(1997)も人間が作る社会構造は、権威を持つ者から持たない者に至る緩やかな一定の順位を必要としており、子どもの社会化を進める上で、家族の中で人間関係の原則を理解させ、社会集団に参加させる準備を行うことは重要であると述べている。したがって、家族成員間にパワー差があり、親サブシステムと子どもとの間に世代間境界があるのは健康的な家族の形であると言えるのかもしれない。

しかし、上記の家族構造とは逆に、家族の中で自己のパワーが最も高いとイメージしている子どもが10.9%と全体の1割以上を占めている。この要因について、今回の結果からのみでは検証することが出来なかったが、今後更なる検討が必要であると考えられる。

(3) 各分析項目の関連

子どもの家族イメージから検証された各分析項目について相関を求めたところ、母子の結びつきと子どものパワーにやや強い正の有意な相関がみられた($r=.264, p<.05$)。母親と繋がっていると感じることで、子どもは一人の存在として認められていると実感し、自己のパワーについて、高く評価しているのではないかと考えられる。新藤他(2002)は、児童期後期・青春前期における子どもは、第二の分離・固体化に向けて幼少期の母子関係に挑もうとしており、この時期に子どもは確固たる母子の絆を再確認することによって自立に向かっていけるのであると述べている。つまり、この時期の母子の結びつきの強さは、子どもが自立しようとする力との間に重要な関係性があるとも思われる。

また、母子の結びつきと父子の結びつきにやや強い正の有意な相関がみられた($r=.443, p<.01$)。子どもが両親との結びつきについて考えたとき、どちらか一方に偏ることなく、父子、母子ともに結びつきが強いということである。すなわち、子

どもは、両親の力を個々のものとして感じるのではなく、両親を相互に影響し合うひとつの連合として捉えていると思われる。このことは、親子関係は単に父と子・母と子という独立した関係ではなく、父と子の関係と母と子の関係が互いに影響するものである可能性について述べた飛田(1989)の研究と一致するものである。

4. 母親の主観的幸福感と子どもの家族イメージ

母親の主観的幸福感と子どもの家族イメージから検証された各分析について相関を求めたところ、母親の主観的幸福感と母親のパワーにやや強い正の有意な相関がみられた($r=.256, p<.05$)。母親が幸せを感じていると、子どもから見て母親は生き生きしていると映り、存在感も大きくなるのではないかと考えられる。さらには、子どもから一目置かれている存在感が母親の幸福感にも関係していることが伺える。

また、母親の主観的幸福感と子どものパワーにやや強い負の有意な相関がみられた($r=-.256, p<.05$)。子どもが自分のことを強いと思っていると、相対的に母親は幸福感が低い傾向がある。母親は子どものパワーが強いことに対して不本意だと感じている可能性が考えられる。

また、母親の夫婦関係満足度と母親のパワーにやや強い正の有意な相関がみられた($r=.256, p<.05$)。夫婦関係とは、父と母の相互の関係性があるにも関わらず、母のみが子どもから捉えられている。今回の研究では、母親のみからの夫婦関係満足度ではあるが、子どもは母親との関係によって父親との関係やその他の関係が位置付けられるという大下ら(1999)の研究に裏付けられ、家族の中で母親が重要な位置を占めているのではないかと示唆している。

IV. 本研究のまとめと今後の課題

本研究では、母親の夫婦関係と社会的つながり

の満足度が母親の主観的幸福感にどのように影響するか検討した。夫婦関係と社会的つながりは、母親の主観的幸福感とやや強い関連が見られた。これらの人間関係の充実感が母親の主観的幸福感に関係しているのではないかということが考えられた。また、母親の主観的幸福感が子どもの家族イメージにどのように影響を及ぼすかを検討した。その結果、母親の主観的幸福感と夫婦関係満足度は、子どもが捉える母親のパワーイメージとの間に関連が見られた。よって、母親が幸せを感じていたり、夫婦関係が円滑に営まれていることを子どもは敏感に感じ、母親の存在を強く捉える。また、子どもが母親の存在感を強く捉えている場合に母親自身はさらに幸せに感じたり夫婦関係が良くなるといった関連も考えられる。

今回、子どもが捉える家族を家族イメージ法によって検討を行ったが、家族イメージは、質的には捉えられるため、個別理解には役立つが、量的には「良い家族像」が確立していないために、難しい部分がある。家族イメージについての質問も合わせて調査できたら、エビデンスがもっとはっきりしてくるかもしれない。さらに、家族イメージにおける心理的距離と結びつきの間に、本来は関係性が見られるはずの相関が見られなかった。これは小学生が、家族の食事場面といった現実場面を図に表していたために、無意識レベルの心的距離が表されなかった可能性が考えられる。今後方法論についても更なる検討が必要であると考えられる。

引用・参考文献

- 秋丸貴子・亀口憲治 1988 家族イメージ法による家族関係認知に関する研究 家族心理学研究 第2巻1号 61-74
- 石井留美 1996 主観的幸福感と性格傾向の関連について 日本性格心理学会大会発表論文集 5号 58-59
- 伊藤裕子・相良順子・池田政子他 2003 主観的幸福感尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 心理学研究 第74巻3号 276-281
- 伊藤裕子・相良順子・池田政子 2004 既婚者の心理的健康に及ぼす結婚生活と職業生活の影響 心理学研究 第75巻 435-441
- 伊藤裕子・相良順子・池田政子 2006 夫婦のコミュニケーションと関係満足度、心理的健康の関連—子育て期のペア・データの分析 家族問題相談研究 第4巻 51-61
- 遠藤由美 1997 親密な関係性における高揚と相対的自己卑下 心理学研究 第68巻 387-395
- 大下由美・亀口憲治 1998 ウィグル族と日本の家族イメージの比較研究：1—両親イメージの差異 家族心理学研究 第12巻1号 41-52
- 大下由美・亀口憲治 1999 中学2年生の家族イメージの研究—父、母、子の3者関係イメージ家族心理学研究 第13巻1号 1-13
- 尾形和男・宮下一博 2003 母親の養育行動に及ぼす要因の検討—父親の協力的関わりに基づく夫婦関係、母親のストレスを中心にして— 千葉大学教育学部研究紀要 第51巻 5-15
- 数井みゆき 1998 育児ストレスと子どもの発達との関連についての一考察 茨城大学教育学部教育研究所紀要 29, 57-65
- 亀口憲治監 2003 FIT (家族イメージ法) マニュアル システムパブリカ サルヴァドール・ミニューチン、山根常男 (監) 1984 家族と家族療法 誠信書房
- 新藤克己・相模健人・田中雄三 2002 小学生の「家族イメージ」に関する研究 家族心理学研究 第16巻2号 67-80
- 菅原ますみ・八木下暁子・詫摩紀子・小泉智恵・瀬地山葉矢・菅原健介・北村俊則 2002 夫婦関係と児童期の子どもの抑うつ傾向との関連：家族機能および両親の養育態度を媒介として 教育心理学研究 第50巻 129-140
- 荘巖舜哉 1997 文化と感情の心理生態学 金子書房
- 土肥伊都子・広沢俊宗・田中国夫 1990 多重な役割従事に関する研究—性役割従事タイプ、達成感と男性性、女性性の効果 社会心理学研究 5(2), 137-

145

諸井克英 1996 家庭内労働の分担における衡平性の
知覚 家族心理学研究 10(1), 15-30

山田英津子・有吉浩美・堀川淳子・石原逸子 2005
働く母親のソーシャル・サポート・ネットワークの
実態 産業医科大学雑誌 第27巻1号 41-62

飛田 操 1989 親子関係における対人機能の交換と
満足度との関連について — 女子青年を対象とし
て —